



日本介護食品協議会では、昨年より「7月11日」を「UDF(ユニバーサルデザインフード)の日」と決めました。これは、2003年の7月11日にその名称や、ロゴマークが商標登録を受けたことに由来します。

以来、UDF登録数は増加の一途をたどり、現在では2,025アイテム、加盟企業についても76社を数えます。

そもそも、介護食品は1990年代後半より市販用製品が発売され始めましたが、以降、参入企業は増えるものの、当時は「やわらかい」「食べやすい」の考え方は企業独自のものでした。そこで、介護食品業界では、メーカーを問わず、ご利用者が自分に合った製品を選択しやすいよう、食品の物性値や表示方法など統一基準を設けました。これがUDFです。

以降、協議会では食事介護が必要な方々へ「食べる楽しみ」を提供できるよう会員企業とともに努力を重ねて参りました。とはいえ、UDFの認知率向上や売り場の整備など解決したい課題は山積みです。このような想いが「UDFの日」を定める契機となりました。

これからも、必要な方にいつでもUDFを手にとっていただけるよう、一層の普及啓発を行ってまいります。この活動が少しでも多くの方々の食を支えることにつながっていけば幸いです。

(介護食品メーカー 藤崎 亨)

## URUZOメンバーが贈る介護食品

### ① 株式会社明治

私は、日々、高齢社会の栄養問題対策への疑問を抱いております。

弊社では在宅介護現場で食事が十分に取れない方の栄養サポートということでメイバランスシリーズを展開しております。



お陰様でメイバランスは医療・介護従事者の方には「知っていますよ」と言われることが多くなってきましたが、介護家族の認知は40%程とまだまだ知られておりません。

約7割の在宅要介護者が低栄養やその恐れがあり、未だにその割合が減ったということを目にしません。国民健康・栄養調査でBMI20以下の低栄養傾向にある方が65歳以上の健常者の約17%存在し、その割合はここ10年減少しておりません。2025年問題を控え、その比率が変わらなければ大変なことになると予測されています。

やはり、栄養不足にならないということが大切ということでしょうか？皆さんはどう思われますか？

メイバランスはこれからも栄養サポートに徹し、店頭で購入できる商品を飲む・食べるタイプに加えてアイスも発売しました。栄養の面から食を支えていきたいと思いません。食支援を実践できるように皆様とともに頑張っ参ります！

(介護食品メーカー 不二 靖弘)

## STと一緒にやってみよう！

### ～摂食・嚥下評価編～

### 訪問看護ステーションリカバリー

柴山 亜紗美

言語聴覚士(以下ST)の働きについては、以前にもお伝えしてきたことがありますが、今回は、実際の摂食・嚥下評価はどう行うのかについて、お伝えしていきます。

見る視点としては、①見た目、②コミュニケーション、③食事の3つとなります。

「見た目」の項目は、◆姿勢は保たれているか？◆ヨダレはでていないか？◆意識レベルはいいか？◆やせていないか？の4つとなります。

「コミュニケーション」の項目は、◆聞き取りやすさはどうか？◆会話は成立するか？の2つですが、この項目では細かく問題点を評価していきます。ここでの視点は、「なぜ」聞き取りにくいのか？を考えていきます。例えば、呂律が回らない、鼻にかかったような声、入れ歯がない・合わないは、具体的に、頬や口唇、舌、歯、軟口蓋、下顎をみています。これらの器官は、食べ物を口に入れてから飲み込むまでに関わる大切な器官です。STとしては、例えば、発音から「カ行」の音が「ハ行」に近いと感じれば、舌の奥の力が弱いため、食べ物を口でまとめた後、喉へ送り込む時に問題があるかもしれない、と評価します。

特に、発音から評価しやすいのは、口唇と舌です。唇を使う音「ぱ」、舌先を使う音「た」、舌の奥を使う音「か」、舌先を弾くようによく動かす音「ら」。これらの発音をすることで、効率よく、口唇、舌の運動、筋トレができま

す。だから嚥下のリハビリに「ぱたから体操」が使われます。その他、聞き取りにくい要素としては、声が嘎れている、ガラガラ声、カサカサ声・声が小さいもあります。ここから、何がわかるかというと、呼吸、呼気量と声を出す器官である声帯の状態、また、痰がらみの有無をみています。

まず呼吸、呼気量はムセの力に関係します。ムセた後にしっかりと吐き出すことができれば、誤嚥性肺炎になるリスクは下がります。次に声帯の状態ですが、吐く息は強いのに声が小さくカサカサしているときは、「あー」と声を出しているときに、しっかり声帯が閉じていない可能性が考えられます。食べ物などをごっくんと飲み込む、嚥下反射時は普通、声帯が閉じることで誤嚥を防ぎますが、十分に閉じることができないと声帯は器官の入り口なので、食べ物が気管に入りやすくなり、誤嚥のリスクが上がってしまいます。

「食事」の項目は、◆ムセはないか？◆食べこぼしはないか？の2つで、補足の項目として、◆体重の減少が無い？◆食事は減っていないか？◆口の中に食べ物は残っていないか？の3つとなります。

この評価表は、専門職ではなく、ご家族でも評価ができるように簡易的に作ってあります。是非、目の前の利用者を実施し、一つでも△があれば専門職に「つなぐ」を行ってみましょう。

